

会 誌

第四十四号

平成 24 年 12 月

大阪市立大学大学院医学研究科
分子病態薬理学教室 同窓会

村野匡先生の訃報に接して

山本研二郎

平成 23 年 12 月 27 日に薬理学会名誉会員で和歌山医大名誉教授の村野匡先生が 92 歳で逝去されました。

先生は昭和 19 年京城帝国大学医学部を卒業、大学院に進まれましたが、終戦後帰国され、大沢実験治療学研究所に勤務されました。昭和 24 年 6 月、京城時代の恩師であった上田重郎先生が大阪市立医大薬理学教室の初代教授として赴任されましたので、その縁で村野先生は助手として採用されました。その後、26 年 12 月に助教授に昇任、34 年 12 月に和歌山医大教授に就任され、教育、研究に非凡な才能を発揮、その後同大学の学長として大学の管理運営にも見事な手腕を振るわれました。大阪市大薬理学教室には 10 年ほど在職されたことになります。私は 26 年 4 月から 6 年間研究生として在籍しましたので、村野助教授には一から研究の手ほどきを受けました。

上田教授は極めて温厚な方で、研究も古典薬理学の手法を多用されましたが、村野助教授は正反対の激しい性格で、当時めざましい発展を遂げていた生化学を研究分野に取り入れられました。私は直接村野先生のご指導を受けていましたが、先生は他の分野との交流も積極的に進められ、お陰で大阪市立工業研究所、阪大理学部、東大医学部、岡大医学部の人達との付き合いも財産として頂きました。若かった頃の思い出として、Bauldwin 著、Dynamic Aspect of Biochemistry、当時は原本はとても手が届かず、所謂香港版を買って、むさぼるように輪読会をしたことを覚えております。私は 36 年 7 月村野先生の後任として助教授に就任しましたが、和歌山医大へは度々お伺いしました。学生運動の激しかった時代には学長として御苦勞されました。先生は話術に長けた方で、色んな裏話を面白おかしく聞かせて頂きました。後年、私が同じような職に就いたときには大いに参考になりました。

私は若い頃、御性格の全く異なった二人の先生のご指導を受けたことを感謝の念を込めて懐かしく思い出にしております。村野先生、有り難うございました。心からご冥福をお祈り致します。

理事長就任のこと

岩尾 洋

平成24年3月14日（水）の選挙結果で理事に選出され、15日（木）の新理事会で松木理事長欠席のため米田常務理事・編集委員長が議長となり新理事長の選出を行いました。12時からの新理事会は2名の新監事が欠席のため理事会が成立せず理事懇談会として行われ、理事長候補者に推薦されました。後日に持ち回り審議にて全理事・監事の承諾により3月22日付けで理事長に就任しました。理事長の最初の仕事は法人の代表としての登記です。それから各種常置委員会の委員長をお願いすることです。サイエンスの方面の仕事であれば何とかこなせるのですが、薬理学会の抱える問題は経営問題です。我々のような研究者にはまったく不向きな仕事です。

前年度の会計報告では約1000万円の赤字でした。理事長就任前に総会により既に今年度の予算は決められています。最近になり今年度も1000万円ほどの赤字だと聞かされましたが、「何でやねん」と思いましたが、よく考えてみると昨年度とあまり変わっていない予算案を理事長就任前の私も含めて総会で承認しておりました。つくづくええ加減なもんやと反省しております。次年度から責任を持って予算案を作成することになります。現在の薬理学会の収入は会費収入が約6100万円と編集関係の約3000万円です。一方支出は編集関連が約6600万円、事務局関連経費が約3500万円です。どこを削って1000万円浮かせればよいのか無い知恵を絞っております。

以前に編集委員長をお引き受けした時も、財政状況が悪いことから三品理事長の指示のもと、編集部職員の早期退職と編集業務の外部委託をして経費の削減を行いました。その時に聞かされた話では「10年は大丈夫だろう」ということでした。テレビに出てくる評論家や学者先生と同じで、研究者の言うことは全く当てにならないし無責任な発言ですね。喉もと過ぎれば何とやらで、薬理学会の経営も直ぐに無責任な側面が出てくるようです。このまま行くと約6年で破産の憂き目に会います。治楽会の先生方も含めて諸先輩がたが営々と築かれた学会を破産させないように大幅な学会の体制の変革が急務です。まあ何とかかなるでしょう。

突発性難聴のこと

9月末に突然に突発性難聴に罹りました。夕方晩御飯時にお酒を飲み、よい気で転寝をして目覚めたときに右の耳で耳鳴りがありました。気にせずそのまま本格的に寝てしまいました。翌朝気がつくと耳鳴りが依然続いていました。家内に耳鳴りがすることを告げると、耳は聞こえているのかと聞かれ、左耳を押さえて右の耳で音を聞きましたがほとんど聞こえていませんでした。これはえらい事になったと、早速に職場の耳鼻科の先生の診察を受けました。聴力検査の結果は右耳の聴力が極端に低下しておりました。入院して治療を受けますかと聞かれましたが、丁重にお断りして通院での治療をお願いいたしました。その時ついでにお酒は飲んでも良いかを聞きますと、「あなたは真面目に聞いて増すか」という顔で無視されました。血液検査や感染症などが無いことを確認後にステロイドの大量治療を2週間受け、1週間ほどで少し聞こえ出し、静かなときには耳鳴りがあり、少し良くなり聞こえ出すときにある波長の音が共鳴したり、耳が詰まったような感じがありました。2週間でほぼ元に戻りました。原因はまったく分かりません。

ストレスによるという説が最も有力なのですが、現代社会に於いては何がしかのストレスは皆様感じておられることです。主治医の先生から元に戻る確立は3分の1ですと治療終了後に言われましたが、まあ原因はともあれ治療効果が現れ元に戻ったことは運が良かったの一言に尽きます。大体ステロイドを治療に使用する時はろくな病気ではありません。ステロイドの副作用を学生には講義で教えているのですが、自身で体験しようとは夢にも思いませんでした。長期の使用で感染症を起こしたり、糖尿病、高血圧、脂質異常、骨粗しょう症、白内障などが発症したり増悪したりしますが、私の場合は短期ですので大丈夫だったようです。それでもステロイド以外にも胃腸障害予防のための薬と各種ビタミン剤を服用しました。

どうしても避けられないのは不眠症と時々躁状態になることで、一晩中眠れず悶々としていたり、数時間の睡眠しか取れなかったりしましたが何とか乗り切れました。もひとつは不眠の影響かもしれませんが午後からやたらと疲れやすいことです。また、右から接近してくる車の音が聞こえないためビックリする事がしばしばあり、静かに走るプリウスには困ります。耳の不自由なヒトの気持ちが少し判った気がしました。皆様もストレスは避けて体をご自愛ください。

奥村先生を偲んで

三浦 克之

10月24日朝、奥様より奥村先生ご逝去との知らせがありました。昨年夏に脳出血で倒れて以来、懸命のリハビリを続けて来られたのですが、最近になって、食道の進行癌が見つかり、元の職場でもあった大阪市立総合医療センターに転院されていました。残念ながら、回復することなく帰らぬ人となりました。まだ50歳、いくら何でも若すぎます。

奥村道昭先生は昭和62年に本学医学部をご卒業後、第2内科に入局、昭和63年からは大学院生として薬理学教室に来られました。山本先生からは私と一緒に研究するようにとご指示をいただき、奥村先生は私にとって初めて直接指導した大学院生となりました。教室の皆からはオックンと呼ばれていました。オックンは高校球児で大学でも最初は本学の硬式野球部に入っていたそうで所謂体育会系の人間でした。私も高校、大学とずっと野球をしていたこともあり、オックンとは当初から波長が良く合っていました、その後も、いるところは違っても心を通わせ会う間柄でした。私のことをミーサン、ミーサンと良く慕ってくれました。大学院時代は奥村先生とは麻酔したイヌを使って腎臓でのアデノシンの役割について一緒に実験していました。当時はイヌを使っている *in vivo* の実験をしていたグループには雪村時人先生を筆頭に整形から来た七野先生、山下先生、1年後からは山中先生も加わり、大変賑やかでした。奥村先生は図体もたくましく手指も太いのですが、手先は大変器用で、動物の手術はほとんど彼任せでした。朝から実験をしてはプロトコル終了後も、まだイヌも元気だし、引き続き別の試しの実験をしようかといった具合で結構深夜まで実験を続けていた当時が大変懐かしく感じられます。得られたデータを持っていろんな所の学会発表に行きましたが、大抵は二人道中を共にしていましたので、いろんな懐かしい思い出が頭の中を巡ります。中でも平成3年シカゴであった High Blood Pressure Council (AHA)でのオックンの発表に一緒に行ったのは楽しい思い出です。学会会場に泊まっていたので、昼間は真面目に学会で勉強していた私たちですが、時差ボケで昼間ぐっすり寝ていた当時香川におられた岩尾先生たちの夜襲に遭い、部屋の冷蔵庫のお酒を空っぽにされたのもいい思い出です。学会終了後、オックンは一旦ボストンの細井先生の所に遊びに、私は留学時にお世話になった先生に会いにクリーブランドに行った後、また合流して

ミシガン州立大学のスピールマン博士のところに行きました。当日は腎臓のアデノシン研究で意見交換をしたのですが、私の荷物にゴルフクラブがあるのを見つけると隣のラボの先生に翌日ゴルフに連れて行ってもらったのも楽しい思い出です。

オックンとの思い出は尽きるところがありません。イヌの腎臓の実験をしていた雪村先生、私、オックンは皆、酒飲みで機会を見つけては飲みに行きました。最近ではなかなか会う機会がないので腎臓学会に一緒に行こうとしめし合ひ、酒を酌み交わしたのもこれからはないと思うとやはり寂しいです。彼は大変な読書家で、それほど論文を読んでいたという記憶がないのと対照的に読書が好きな青年でした。ミーサン、この本おもしろいから読んでみたらとたくさんの本を読ましていただきました。特に宮本輝の本がお気に入りであったと記憶しています。そのおかげで私も宮本輝の本は大抵読んだ記憶があります。オックンは大学院修了後、2内人事で白鷺病院勤務を経て、大阪市立総合医療センターで今西先生のもと、腎臓内科医として過ごされた後、大阪市保健センターを経て大阪市では感染症の医療行政に携わっておられました。その頃、お借りした本ですが感染症に関する実話やフィクションを綴った本も読ませていただきました。カミング・プレイグ、ホットゾーン、感染地図、これらの本の内容には私ものめりこむ思いでした。オックンのご厚意でこれらの本は医学部の図書館に寄贈してあります。是非、医学を目指す学生に読んでほしいと思ったからです。かように、オックンはどこに行っても一生懸命仕事に打ち込まれ、その時、それぞれの業にやりがいを感じながら過ごされていたことは私も本人に聞いていましたし、奥様からも伺っています。本当にいい奴でした。10月の初め、オックンの病床にあって、「ヤマチュウ、今年こそノーベル賞取れたらなあ」と言ったことが現実となり、しかも彼自身がこの受賞を喜ぶことが出来たのはオックンにとっても何よりのものでした。けれど、やっぱり早すぎます。

最後に奥村先生の訃報を聞いて池本先生から頂いたメールを転記します。

今日、夜に帰宅して奥村先生の訃報を聞きました。三浦先生からかねがね聞いていたことで、来るべき時が来たと言う気はしましたが、残念を通り越して無念であります。

奥村君は私の直接の教え子ではありませんが良く慕ってくれました。1989年の秋、私が大学を離れると発表した後に、若い人たちが遙々と明石の私の家を訪ねてくれました。今は精神科の通称クロパン黒田君（現梅本先生）、しばらく自宅にいましたがこのたび開業した通称ヤヨイチャン中野君（現周藤先生）、皮膚科の通称オミキ（現安永先生）、総合医療センターの細井先生、開業の山下先生、等と一緒に来てくれました。奥村君は私の家でお酒を飲み、皆で自宅から近い高台から瀬戸内海と淡路島を展望に行くときには私の家で一人ぐっすりと寝込んでいた、というエピソードもあります。

総合医療センターではせっかくの面白い研究テーマを持っていたのがなかなか完成に漕ぎつけず、今西先生に励まされて結構面白いエビデンスをものして論文を書き上げましたが、その時には私も及ばずながらお手伝いしました。良くできた研究作品でした。その後で、フラリと熊谷の私の家を訪ねてくれました。田舎ではうまい晩飯もないと言うので東京に出て家内も一緒にレストランに入りました。

とても素直な人で、あらゆる意味で裏も表もない、いや、そういう使い分けのできない人だったと思っています。その代わり自分の思うままの人生を歩んだのだと思っています。お葬式もいやだ、何もしないでくれと言いついて逝ってしまったのも、彼らしいような気がします。

でも無念です。もっと話したかったのです。治楽会で会えば、なんのテライもなく話してくれる一人でした。

私は口はばったいですが、薬理で私の直接の指導を受けた人でなくても、少しでも私がお手伝いした人が、一人でも不幸になることは、私には耐えられないのです。こんな情けないことはありません。

山中先生ノーベル賞受賞おめでとう

三浦 克之

10月8日の午後6時半、私は自宅でパソコンの画面に映っているノーベル財団のホームページ上のライブ映像に釘付けになっていました。選考委員長がShinya Yamanakaと言った瞬間、一緒に見ていた家内と万歳を三唱しながら抱き合っていました。山中先生はここ数年、毎年ノーベル賞候補と言われて来ましたが、今年はもらえるのではないかと内心想っていました。病床にあって奥村君とも「やまちゅう、今年とってほしいな」と言い合っていました。奥村君は山中先生受賞の感激を味わうことが出来たのです。

山中先生は神戸大学卒業後、大阪市大の整形外科に入局され国立大阪病院で臨床研修を受けていました。研修終了後、1989年に薬理学教室の大学院に来られたのは市大のスポーツ整形外科のリーダの大久保衛先生（現びわこ成蹊スポーツ大学教授）が薬理学を強く勧めていただいたからだと聞いています。大久保先生は大学院時代に安部陽一先生の指導を受け、骨循環の研究をされていました。そのような関係で整形外科から大学院生が何人も来られていたのですが、山中君もその一人でした。山本研二郎先生の最後の弟子です。1年上に同じく整形外科から来た山下豊先生がおられて、愛称「やまちゃん」でしたので、山中先生は「やまちゅう」と呼ばれるようになりました。私どもが当時行っていた研究に関連した課題である血小板活性化因子の循環作用機序を明らかにすることが彼の研究のスタートでした。基本的には生きた動物を使った循環の実験とそれらから得られた血液サンプルの成分測定といった研究手法だったのですが、当初から彼の優秀さは目を見張るものがあって、私たちが考えた仮説に対する検証法を極めて論理的に考え出し、かつ得られた結果を踏まえてさらに新しい作業仮説と、それを証明する実験をうまく組み立てるといった能力は早いうちから身につけていました。学位論文そのもの (Circulation research, 1992) はレフリーとのやり取りで結構苦勞したのですが、その間にも追加実験や、研究成果から派生した研究テーマをうまくこなして大学院時代に筆頭著者で4報の論文を仕上げています。結構、同時にいくつもの仕事をうまくこなす能力があったのだと思います。ちなみに動物実験の手術も結構器用にこなしていました。研修医時代の呼ばれ方も含め手術の腕前については本人もおもしろおかしく言っていますが、少なくとも動物の手術については他の外科系の先生方の手技と比

べても決して遜色ないものであったことだけは本人の名誉のために言っておきたいと思います。

人柄も非常にさわやかで、誰にも好かれるタイプでした。学生時代は柔道、ラグビー、そして院生時代も大学に来る前に大阪城公園をランニングしてくる様なスポーツマンで、バイアスロンやトライアスロンにもチャレンジしていたようです。また、彼は非常に切り替えのいい人間でして、夜を徹して仕事をするタイプではなく、適当な時間になるとさっと帰りますし、効率よく時間を使っていたと思います。

1996年に留学から帰ってからは向こうでの研究の続きで NAT1 遺伝子のノックアウトを検討したのですが、胚性致死で生まれてこなかったわけです。たいていの人はこんな場合ギブアップするのだらうと思うのですが、彼のすごいところは、それを個体発生に絡めて仕事を続けていったことだと思います。遺伝子改変マウスを繁殖するとなると当時は動物の世話からケージの交換洗浄に至るまですべて自分がしないといけなかったんで大変だったと思います。分業の概念が明確なアメリカでは研究者自身が動物の世話をすることはあり得ない話で本人もたまらなかったと思います。さすがに今の医学部動物実験施設では研究者自身がケージ交換をする必要はありませんが。この時期は山中先生自身、PAD (Post-America Depression)で辛いことも多々あったようです。そんな中でも留学先から持ち帰った研究を継続、発展させていったことが奈良先端科学技術大学院大学での研究の大きな飛躍とその後の偉大な成果につながったのだらうと思います。

先日のノーベル賞の授賞式もすばらしいものでした。これも 12 月 10 日の夜中にインターネットのニコニコ動画で拝見していましたが、本当に感動的でした。また受賞講演もノーベル財団のホームページで見ましたが、非常にユーモアに富んだスピーチで、今後の更なる発展を目指す姿勢もすばしかったです。

今後の更なる研究の発展を一ファンとして見守っていきたいと思います。

なお、受賞記念講演の映像は以下のサイトで見る事が出来ます。

<http://www.nobelprize.org/mediaplayer/index.php?id=1866>



綿の実

塚原 和子

奥村先生が亡くなった明くる日、わたしは花屋でひと抱えのコットンフラワーを買った。コットンフラワーは、実でありながら、はぜると真っ白な綿の繊維がふわふわとした花のように見え、ホワイトクリスマスを連想させる木としてフラワーアレンジメントによく使われる。これだけあればひとつぐらい見つかるかもしれないと、わたしははじける前の実を探し始めた。

ひとつだけ、あった。ごつごつしていてどっしりと重く、愛想のない焦げ茶色をしている。この中に純白の繊細な綿が詰まっているとは思えないようなそっけなさだ。

奥村先生に会えたような気がしてその実を一輪差しに活け、海に向かった部屋の窓際のテーブルに、土佐鶴の純米酒を入れたグラスとともに置いて掌を合わせた。

奥村先生と初めてお会いしたのは、昭和60年である。当時、わたしは技術職員として薬理学教室でお世話になったばかりで、奥村先生はM5の学生さんだった。光山先生の実験を手伝いに来られていて、教室ではレギュラーメンバーとしてなくてはならない存在であった。実験はもちろんのこと、特に職場対抗野球大会の時には、4番兼キャッチャーとして薬理学教室を優勝へと導いてくださった。

奥村先生は早生まれなので、生まれ年は違うが同じ学年ということもあり、集会室でよく話をした。

奥村先生はわたしに、本を読む楽しさを教えてくださった。宮本輝から始まり、三島由紀夫や高橋和己など、純文学と呼ばれているものが多かった。初期三部作を出したところで今ほど知名度のなかった村上春樹を知ったのも、奥村先生に勧められたことがきっかけだ。

ストーリーの展開よりも、登場人物の心情についてよく話した記憶がある。同じ本でも読み手によって考えることは違っていて、それらを話すのもまた楽しみだった。登場人物の心の動きを細かいところまで奥村先生は捉えていらして、脇役の存在意義や主人公が行動を変える内面描写の伏線などを、熱い口調ではないが気持ちをこめて語られた。

2年間の研修を終えられ、再び大学院生として薬理学教室に來られてからも、奥村先生は、ポーカ―フェイスでありながら、教室員の動きをよくご覧になっていて、困った、どうしよう、と悩みながら顔を上げると、「やあ」と声をかけてくださる奥村先生の笑顔に幾度も出くわした。

本庁への異動が決まって、メールアドレスが与えられ、最初に受け取ったメールも奥村先生からのものだった。

「たぶん同じ仕事をすることになると思うのでよろしく」

そんな内容だったと思う。

その言葉のとおり、わたしは大阪市健康増進計画を推進するためのある会議を担当することになり、奥村先生は委員として、というよりアドバイザーとして会議に参加されることとなった。

市役所の仕事の組立て方や、生活習慣病対策により「健康づくり」を行うという健康増進計画そのものもさっぱりわからないのに、職員研修やイベントを企画、実施し、市民に啓発を行わなければならない。「市民協働による健康づくりをPDCAサイクルを使って行う」と言われても、何のこっちゃというひどい有様だった。

そんなわたしが事務職員として会議を担当したものだから、委員の皆様にとっては迷惑千万だったと思う。万策尽き果てて、気まずい沈黙が会議を支配するなか、奥村先生の「ええんちゃうん？これ（事務局案）で」というさりげない助け船に何度も救われ、さらに講演や事例発表等の無理もお願いした。奥村先生の講演は笑いにあふれ、まさに「健康づくり」そのものだった。

奥村先生のお姿をもう見かけることはできないが、今でも、朝、出勤後、隣の課の課長席が逆光に包まれているときなど、先生が光の中で座っていらっしゃるような気がすることがある。会議をしていても、自席でPCに向かっていても、ピンチになると「どないしょ、奥村先生」と心の中で自然と相談している。その感覚は、どうやらわたしだけではないらしい。

「こんなとき、奥村先生がいてくれたらなあ」

医務監（部長級の医師）ふたりが交互につぶやく。

奥村先生の気配は、洗い晒しの木綿のように、ごわごわとしているのだが、つかず離れずの距離で私たちのそばにいて、汗をねぎらい、涙をそっと吸い取

り、時には「そら、あかんで」と、タオルを投げて限界を教えてくれる。十月の末に行われた市会の打ち上げの際には、はじめにビールを注いでカウンターに置き、会の終わりに竹内医務監がそのビールを飲み干された。

「なるようになったら上等ちゃうん？」

奥村先生はよくそうおっしゃった。それは、「なるように努力してそうさせる」ことを意味している。平成二十四年元旦にいただいた年賀状に、「リハビリに励んでいます」と、みずほ夫人の字が添えられてあった。わたしは「職場に戻る」という奥村先生の強い意志と、凄まじいリハビリの努力を感じた。

努力の先には、希望がなければならない。希望を持つことが難しい状況で、奥村先生を支えられた夫人の心労は、察するにあまりある。

みずほ夫人がくださった「大阪市健康局の皆様」というお手紙の中に、奥村先生は散骨を望まれたが、当分の間は夫人がご自宅にお預かりになると書かれてあった。「当分の間」とは夫人が生きていらっしゃる間ということで、「夫は、お客様を家にお招きするのが好きでしたし、私も夫のことをお話しできるのが嬉しいですので、遠慮なくお参り下さい」と、お礼の言葉とともに結ばれていた。

奥村先生は、みんなの心の中で生きている。

心から奥村先生のご冥福を祈るとともに、これからも皆を見守ってくださいと願わずにはられない。

奥村先生、本当にありがとうございました。

いざ京都・北山の大学へ

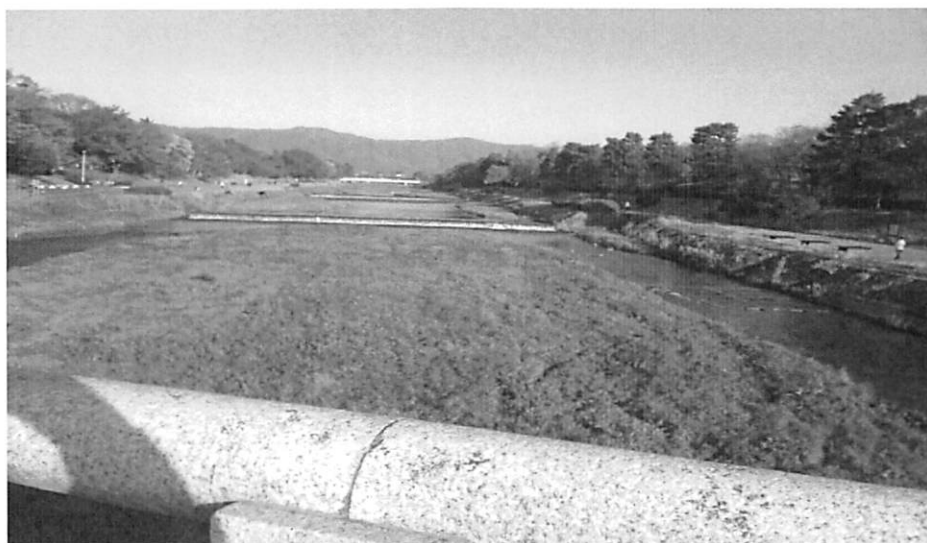
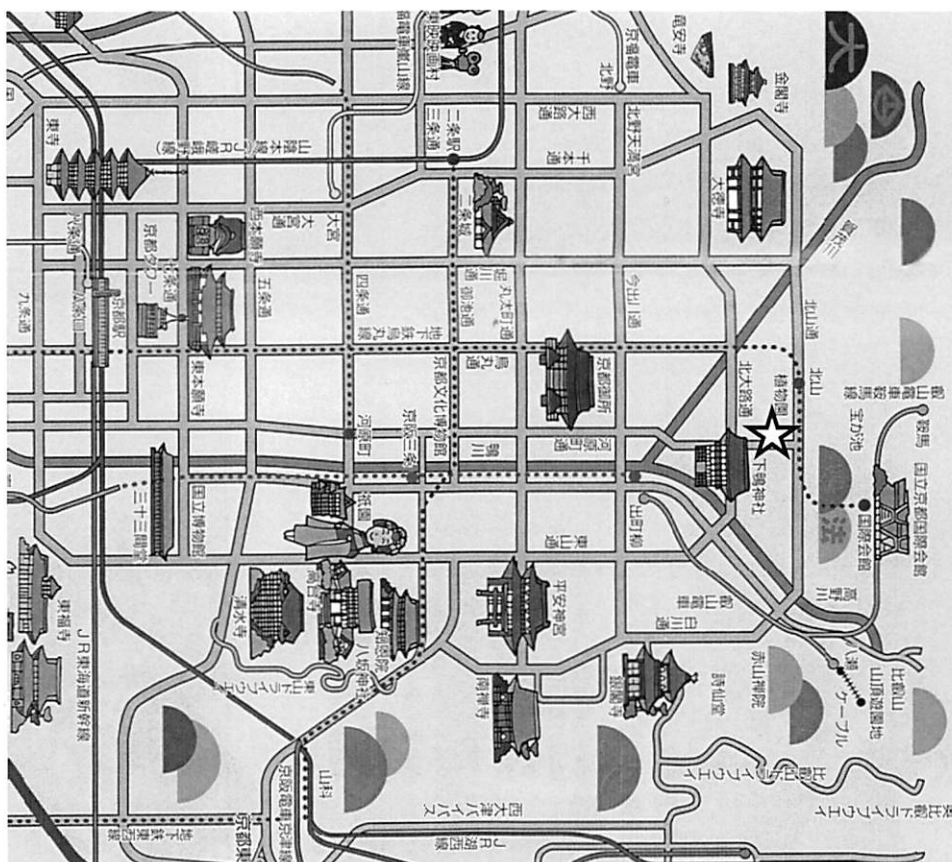
岡 真優子

2012年10月8日夕刻の速報に喚起し胸躍らせたことが、今なお新鮮な記憶として頭に残っています。当研究室ご出身の山中 伸弥先生がノーベル医学生理学賞を受賞されたことに心よりお祝い申し上げますと共に、本研究室の一員として皆様方と一緒に喜べることをうれしく感じています。私が生体化学（船江 良彦 教授）の大学院1年生の頃、当時薬理学で助手をされていた山中先生に、クローニングリングを用いた細胞のクローニング方法をご教示頂いたことがあります。お願いに上がった際、快く引き受けてくださった先生との出会いは、先生と私の接点として、これからも大切な思い出になることでしょう。そして、偉人が育った当研究室で研究活動していることを大切にしたいと思います。

私は、今年の会誌に着任のご挨拶と本研究室での抱負を述べましたが、今回、お世話になったお礼と新天地での抱負を申し上げることになりました。本年10月1日より京都府立大学大学院生命環境科学研究科応用生命科学専攻の教員として新しい一步を踏み出しております。薬理学に所属した期間は1年半の短いものでしたが、それ以上の期間に感じられる充実した時間を重ねることができました。山中先生の取材にいらっしゃったNHKの記者の方が、アットホームな研究室ですねと感想を漏らされたように、本研究室は、団結力のある明るいラボです。学生もスタッフも一緒になって研究に取り組み、セミナーでは自分の意見をぶつけ合い納得するまで議論します。また、本研究室には3名の学部生が所属しており、講義やクラブ活動をしながら、一方で戦力として実験に取り組んでいます。私自身、学部生から刺激を受けながら過ごしていました。京都府立大学に異動後も、これまで以上の太いつながりを持って本研究室と共同研究を進めていきたいと思っています。

さて、新しい職場となる京都府立大学について、ご存じない方もいらっしゃると思いますので、ご紹介させていただきます。場所は、京都駅から地下鉄烏丸線に乗って16分のところにある北山駅が最寄りです。駅の正面には京都府立植物園があり、その南東方向に下鴨キャンパスがあります（下記の地図中★）。自然豊かな環境で、キャンパス内にも数々の古く珍しい木があるそうです。私は毎朝、北山駅の一つ手前にある北大路駅で下車し、賀茂川を渡り大学まで歩いています。朝日で輝く川の流れを見ながら、門をくぐると、鳥の鳴き声と高原を歩いているようなすがすがしい空気を感ずることができます。川の美しさに、思わず携帯で写真を撮ってしまいました。私は、生命環境学部食保健学科の学部生と生命環境科学研究科の大学院生を対象とした講義を担当しています。具体的には、学部1年生の公衆衛生学、2年生の環境毒性学・微生物学、また大学院生には毒や微生物感染などによる生体防御機構についてです。第1回目の講義で自己紹介をしてもらったところ、1年生も2年生もほぼ全員が食えることが好きです！と書いてくれました。また、バイトは、食に関わる内容で、目標は、栄養士・管理栄養士・調理師の資格を取ること！と意欲をみなぎらせていました。これまで、常に「薬」の代謝や薬理作用を中心に講義していましたが、これからは、管理栄養士の養成課程であることから、「食」を中心に学生の興味と知識を増やすことを考えなければならないと思っています。

私は、学生に負けず劣らず食えることが好きなので、新しい環境にすぐ馴染めるとしています。そして、これからは、健康とは何か？の答えとして、病気の治療だけでなく病気の予防を心掛ける、そんな新しい研究を進めていきたいと思っています。



北大路大橋から眺めた鴨川

新入生紹介

M1 川口 真紗子

はじめまして。修士 1 年の川口真紗子です。今年の 4 月から薬理の教室でお世話になっています。おそらくまだお会いしたことのない方々も、この文面に目を通して下さるかと思いますが、簡単な自己紹介も交えてお話をさせていただきます。

私の出身学部は、岡山大学工学部生物機能工学科で、偶然にも今お世話になっている塩田先生の後輩です。出身地は和歌山県なので、関西圏に戻りたいという気持ちもあり関西の大学院に絞り、研究室訪問しました。訪問した際、塩田先生から研究概要を説明していただいたのですが、先生の端的な説明の仕方と、自作のツールを用いた研究を行っているという点に惹かれ、ここなら時間を有効に使って尚且つ面白そうな実験ができると感じ、受験しました。そして 4 月、わくわくと緊張の入り混じった複雑な気持ちで教室に入りました。初日は大雨で雷さえ鳴っていたのですが、その記憶以上に、「先生、雷ですよー！」と言って楽しそうな薬理の雰囲気驚いたことを未だに覚えています。学部の時に所属していた研究室は、比較的大人しい雰囲気だったので、そのギャップに圧倒されたのですが、今ではこの薬理の雰囲気は私の学生生活になくてはならないものになっています。この雰囲気を作って下さっている岩尾先生はじめ薬理の先生方、先輩、薬理のメンバーには本当に感謝しています。ありがとうございます。

入学してから約 8 か月が過ぎ、いろんな経験をさせていただきました。実験の技術的な面では、今まで使ったことのない試薬や器具を使用させていただき、そのおかげで入学前に比べ実験手法も数多く習得できました。私自身についても何度も見直す機会をもらいました。まだまだ未熟な私が研究を語るには不相応な立場であると思いますが、研究は山あり谷ありで、面白い内容の研究であればあるほど、山の傾斜は厳しい気がします。前に進むのが辛いこともあります。そんなときでも頑張っているのは、この教室の方々のおかげだと思います。1 年後、今の頂いている研究がどこまで進んでいるか、思うように結果が出せているかは分かりませんが、「この子を探ってよかった」と思ってもらえる存在になればいいなと思います。

今こうして興味深い研究ができているのも、卒業された先輩方が残して下さった成果のおかげであり、指導して下さる先生・先輩方のおかげであると日々感じております。有難うございます。マイペースな性格のため、時には先生方を困らせてしまうこともあると思いますが、今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

そして最後になりましたが、山中伸弥教授、ノーベル賞受賞おめでとうございます。偉大な研究者がこの教室の卒業生であることを誇りに思います。心からお慶び申し上げます。

第 20 回 大阪市大フォーラム

2012 年 8 月 10 日（金）、あべのメディックス 6 階研修室におきまして夏の研究会を開催致しました。発表演題 12 題、そして活発な質疑応答。皆様のお陰を持ちまして盛会となりました。ご多忙の折、また遠路、本当にありがとうございました。

プログラム（敬称略）

1. 13:05-13:20 Key note lecture

塩田 正之（大阪市立大学大学院医学研究科 分子病態薬理学）

2. 13:21-13:38 癌のストレス応答を標的とした Hsc70 結合タンパク質のプロテオーム解析 田中 昌子（大阪市立大学大学院医学研究科 分子病態薬理学）

3. 13:39-13:56 一酸化窒素によるタンパク質修飾の発癌における役割

小澤 健太郎（奈良医科大学 薬理学）

4. 13:57-14:14

DOCA 食塩高血圧動物の血管内皮障害に対するワインポリフェノールの改善効果 佐藤 晃大（大阪薬科大学 病態分子薬理学）

5. 14:15-14:32

心虚血 再灌流後の機能障害とノルエピネフリン過剰放出におけるスーパーオキシドの役割 小山 武志（大阪薬科大学 病態分子薬理学）

6. 14:33-14:50

Angiotensin II 誘発血管リモデリングにおける HIF シグナルの位置づけ

今西 正樹（徳島大学大学院 ヘルスバイオサイエンス研究部 薬理学）

Break

7. 15:10-15:25 Key note lecture

清水 佐紀（大阪薬科大学 薬品作用解析学）

8.15:26-15:43

抗精神病薬による錐体外路系障害に及ぼす抗うつ薬、抗認知症薬の作用評価
水口 裕登

9. 15:44-16:01

新たなてんかん治療標的分子 Kir4.1 チャネルの脳内発現に対する抗てんかん薬
の作用
向井 崇浩（大阪薬科大学 薬品作用解析学）

10. 16:02-16:17 Key note lecture

中野 大介（香川大学医学部 薬理学）

Break

11. 16:35-16:50

Apoptosis inhibitor of macrophage (AIM)と腎臓の線維化
北田 研人（香川大学医学部 薬理学）

12. 16:50-17:20

糖尿病性腎症の発症と進展における腎内・尿中アンジオテンシノーゲン
小堀 浩幸（香川大学医学部 薬理学）

閉会の辞 岩尾 洋

****御出席者名簿（敬称略、順不同）****

当日受付にて御記帳いただいた方を掲載しております。

☆大阪薬科大学 病態分子薬理学

和田 智予・阪上 嘉久・永田 裕介・澤野 達哉・盛尾 明希
和田 高明 今田有紀・米村 裕紀・大西 亜以子・西崎 天優
長谷川 愛里・松村 靖夫・小山 武志・佐藤 晃大・中林 伸介
小山 真季・溝口 雄輔・江見 昌之・木内 美花・山口 綾樹
竹内 督尚

☆大阪薬科大学 薬品作用解析学

森本 朋樹・上田 陽子・水口 裕登・阪上 善久・長尾 侑紀・木津 朋
也・大野 行弘・清水 佑紀・祖久江・顕 國澤 直史・田村 深雪
増井 淳

☆大阪大谷大学 臨床薬理学講座

雪村 時人・三嶋 梨花・岡田 真代実・下條 真未・家永 唯可・立花 祐
太・吉村 公助・福島 啓太・田和 正志・青山 孝・丹波 貴雄
☆香川大学医学部 形態・機能医学講座 薬理学
小堀 浩幸・北田 研人

☆兵庫医療大学 薬学部医療薬学科

字廻 祐輔

☆徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 薬理学

土肥 紗希子・山野 範子・池口・今西 正樹・伊藤 麻里

☆滋賀医科大学 医学部 薬理学

田和 正志・今村 武史

☆ 大阪市立大学 薬効安全性学

立石 悠

☆ 大阪市立大学 大学院医学研究科 分子病態薬理学

岩尾 洋・泉 康雄・塩田 正之・岡 真優子・田中 昌子・高橋 延吉
川口 真紗子

☆鳥取大 医学部

富田 修平

☆奈良県医科大 薬理

吉楢 正典・辻 優一・小澤 健太郎

☆大阪府総合医療センター

今西 政仁・辻 優一

2012 年 論文発表

論文

1. Yamazaki T, Yamashita N, Izumi Y, Nakamura Y, Shiota M, Hanatani A, Shimada K, Muro T, Iwao H, Yoshiyama M. The antifibrotic agent pirfenidone inhibits angiotensin II-induced cardiac hypertrophy in mice. *Hypertens Res* 35: 34-40, 2012.
2. Shiota M, Hikita Y, Kawamoto Y, Kusakabe H, Tanaka M, Izumi Y, Nakao T, Miura K, Funae Y, Iwao H. Pravastatin-induced proangiogenic effects depend upon extracellular FGF-2. *J Cell Mol Med* 16: 2001-2009, 2012.
3. Osada-Oka M, Kita H, Yagi S, Sato T, Izumi Y, Iwao H. Angiotensin AT1 receptor blockers suppress oxidized low-density lipoprotein-derived formation of foam cells. *Eur J Pharmacol* 679: 9-15, 2012.
4. Yamazaki T, Izumi Y, Nakamura Y, Hanatani A, MD, Shimada K, Muro T, Shiota M, Iwao H, Yoshiyama M. A Novel Device that Produces Carbon Dioxide Mist for Myocardial Infarction Treatment in Rats. *Circ J* 76: 1203-1212, 2012.
5. Samukawa K, Izumi Y, Shiota M, Nakao T, Osada-Oka M, Miura K, Iwao H. Red ginseng inhibits scratching behavior associated with atopic dermatitis in experimental animal models. *J Pharmacol Sci* 118: 391-400, 2012.
6. Sakaguchi M, Fukuda S, Shimada K, Izumi Y, Izumiya Y, Nakamura Y, Nakanishi K, Otsuka K, Ogawa H, Fujita M, Yoshikawa J, Yoshiyama M. Preliminary Observations of Passive Exercise Using Whole Body Periodic Acceleration on Coronary Microcirculation and Glucose Tolerance in Patients with Type 2 Diabetes. *J Cardiol* 60: 283-287, 2012.

7. Sakaguchi M, Fukuda S, Shimada K, Izumi Y, Izumiya Y, Nakamura Y, Nakanishi K, Otsuka K, Ogawa H, Fujita M, Yoshikawa J, Yoshiyama M. Preliminary observations of passive exercise using whole body periodic acceleration on coronary microcirculation and glucose tolerance in patients with type 2 diabetes. *J Cardiol* 60: 283-287, 2012.
8. Izumi Y. Potential of microvesicles in cardiovascular diseases. *J Genet Syndr Gene Ther* 3: e107, 2012
9. Yamazaki T, Izumi Y, Nakamura Y, Yamashita N, Fujiki H, Osada-Oka, Shiota M, Hanatani A, Shimada K, Iwao H, Yoshiyama M. Tolvaptan improves left ventricular function in rats with chronic heart failure due to myocardial infarction. *Circ Heart Fail* 5: 794-802, 2012.
10. Fujii Y, Shiota M, Ohkawa Y, Baba A, Wanibuchi H, Kinashi T, Kurosaki T, Baba Y. Surf4 modulates STIM1-dependent calcium entry. *Biochem Biophys Res Commun*. 2012 Jun 15; 422(4):615-20. 2012.

著書

1. Izumi Y, Iwao H. Angiotensin II and its related peptides. *Handbook of biologically active peptides* [in press].
2. 泉 康雄、配合剤の現状と展望－相乗的薬理作用－、*CURRENT THERAPY* 30: 1310, 2012.

Osada-Oka M, Tateishi Y, Hirayama Y, Ozeki Y, Niki M, Kitada S, Maekura R, Tsujimura K, Koide Y, Ohara N, Yamamoto T, Kobayashi K, Matsumoto S. Antigen 85A and Mycobacterial DNA-binding protein 1 are targets of IgG in individuals with past tuberculosis. *Microbiol Immunol*. 2012 Nov 15.

Ikejiri A, Nagai S, Goda N, Kurebayashi Y, Osada-Oka M, Takubo K, Suda T, Koyasu S. Dynamic regulation of Th17 differentiation by oxygen concentrations. *Int Immunol*. 2012 Mar; 24(3):137-46. Epub 2011 Dec 29.

学会発表

1. 塩田正之、田中昌子、岩尾洋
HSP70s 結合分子を標的とした抗がん剤創薬戦略
第85回日本薬理学会年会 2012年3月14-16日 京都
2. 山口麻貴、塩田正之、田中昌子、岡真優子、泉康雄、三浦克之、大川恭行、岩尾洋
細胞外 FGF-2 は内皮細胞の生存に重要である
第85回日本薬理学会年会 2012年3月14-16日 京都
3. 田中昌子、塩田正之、三嶋梨花、下條真未、岡田麻代実、高橋克之、山形雅代、岡真優子、泉康雄、雪村時人、三浦克之、岩尾洋
分子シャペロン Hsc70 を標的とした癌のストレス応答分子同定法の確立
第121回薬理学会近畿部会 2012年6月29日 徳島
4. 田中昌子、高橋克之、鰐淵英機、塩田正之
がんのストレス応答を標的とした Hsc70 クライアントタンパク質のプロテオーム解析
第71回日本癌学会学術総会 2012年9月19-21日 札幌
5. 高橋克之、田中昌子、鰐淵英機、塩田正之
抗癌剤耐性胃癌細胞を用いた Hsp72 クライアントタンパク質のプロテオーム解析
第71回日本癌学会学術総会 2012年9月19-21日 札幌
6. 塩田正之、田中昌子、高橋克之、鰐淵英機
新規 FGF-2 機能阻害抗体による内皮細胞の生存抑制効果
第71回日本癌学会学術総会 2012年9月19-21日 札幌
7. 塩田正之
分子シャペロン結合分子を標的とした疾患マーカー探索システム
イノベーション・ジャパン2012-大学見本市 2012年9月27-28日 東京
8. 塩田正之
キャリアータンパク質結合分子を標的としたタンパク質の高効率同定システム
イノベーションフェア関西 2012年12月6日 大阪

9. 第41回日本心脈管作動物質学会、2月10-11日、秋田
経皮的炭酸ガスミスト処置はラット心筋梗塞後の心機能低下を抑制する
泉 康雄、高橋 延吉、中村 泰浩、山崎 貴紀、塩田 正之、田中 昌子、山口 麻貴、岡 真優子、葭山 稔、岩尾 洋
10. 第76回日本循環器学会学術集会、3月16-18日、福岡
Percutaneous carbon dioxide treatment with gas mist generator enhances collateral blood flow in the ischemic hindlimb
山崎 貴紀、泉 康雄、中村 泰浩、花谷 彰久、島田 健永、室生 卓、葭山 稔
11. 第1回臨床高血圧フォーラム、5月12-13日、大阪
II度以上の高血圧症例に対する高用量ARB投与の有用性（ARB/CCB併用投与との比較検討）
中村 泰浩、泉 康雄、葭山 稔、
12. 第121回日本薬理学会近畿部会 6月29日、徳島
慢性心不全モデルラットに対するバソプレシンV2受容体拮抗薬トルバプタンの効果
泉 康雄、山崎 貴紀、中村 泰浩、高橋 延吉、塩田 正之、岡 真優子、三浦 克之、岩尾 洋
13. 第35回日本高血圧学会総会 9月20-22日、愛知
Nitric oxide synthase (NOS) 阻害薬に対する種差
泉 康雄、中村 泰浩、山崎 貴紀、花谷 彰久、島田 健永、葭山 稔、岩尾 洋
14. American Heart Association Scientific Sessions 2012/11/3-7, Los Angeles, USA.
Percutaneous carbon dioxide treatment using a gas mist generator accelerates angiogenesis in the ischemic hindlimb.
15. Yasukatsu Izumi, Takanori Yamazaki, Yasuhiro Nakamura, Takehiro Yamaguchi, Akihisa Hanatani, Kenei Shimada, Minoru Yoshiyama, Hiroshi Iwao
Percutaneous carbon dioxide mist treatment improves cardiac function after myocardial infarction in rats via nitric oxide activity

16. Takanori Yamazaki, Yasuhiro Nakamura, Yasukatsu Izumi, Takehiro Yamaguchi, Akihisa Hanatani, Kenei Shimada, Hiroshi Iwao, Minoru Yoshiyama

17. Vasopressin V2 receptor antagonist tolvaptan prevents the development of chronic heart failure via its anti-inflammatory and anti-fibrotic actions

18. Takanori Yamazaki, Yasuhiro Nakamura, Yasukatsu Izumi, Takehiro Yamaguchi, Akihisa Hanatani, Kenei Shimada, Hiroshi Iwao, Minoru Yoshiyama

19. 第 122 回日本薬理学会近畿部会 11 月 16 日、大阪
 心血管障害におけるエキソソームの役割
 岡 真優子、西山 方規、泉 康雄、塩田 正之、三浦 克之、岩尾 洋

20. 第 22 回日本循環薬理学会 11 月 30 日、富山
 ラット心筋梗塞急性期に対するバソプレシン V2 受容体拮抗薬の効果
 泉 康雄、中村 泰浩、山崎 貴紀、高橋 延吉、岡 真優子、塩田 正之、三浦克之、
 岩尾 洋

21. 第 85 回日本細菌学会総会 H24,3,27-29 (長崎)
 マクロファージのグルコース代謝による細胞内寄生結核菌の増殖調節
 Glucose metabolism in macrophage suppresses intracellular growth of Mycobacterium tuberculosis
 岡 真優子¹⁾、合田 亘人²⁾、曾我 朋義³⁾、尾関 百合子^{4) 5)}、小林 和夫⁶⁾、松本 壮吉⁴⁾、岩尾 洋¹⁾
¹⁾大阪市大院・医・分子病態薬理学, ²⁾早稲田大理工・生命医科学科, ³⁾慶應大・先端生命研, ⁴⁾大阪市大院・医・細菌学, ⁵⁾ 園田女子大・, ⁶⁾国立感染症研究所・免疫部

22. 第 35 回日本分子生物学会年会 H24,12,11-14 (福岡)
 低酸素下のマクロファージによる肝星細胞の活性化および肝線維化の進展
 岡 真優子¹⁾、南山 幸子²⁾、竹村 茂一³⁾、岩尾 洋¹⁾
¹⁾大阪市大院・医・分子病態薬理学, ²⁾京都府立大院・生命環境, ³⁾大阪市大院・医・肝胆膵外科学,

一言近況報告(敬称略)

2012 年 6 月 9 日(土)に、銀座アスター(難波店)にて、治楽会の小宴を開催しました。御案内葉書に添えた一言近況報告にご返信いただいたものをここに掲載します。皆様、お忙しい中ありがとうございました。

- | | |
|-------------|---|
| 池本 文彦 | 3 月一杯で「失業」、その後無職、素浪人のヒマな生活がやってきました。当日の参加、皆様との再会を楽しみにしています。 |
| 泉家 康宏 | 本年 4 月 1 日より熊本市は政令指定都市となりました。皆様のお越しをお待ちしております。 |
| 上西 泰次
恵子 | 周囲の方々に御迷惑をおかけしないように一日一日を大切にしながら毎日を過ごしております。 |
| 榎原 恒之 | 市政刷新で窮屈なことも多い毎日です。 |
| 太田垣 京子 | 老体の健康に注意しながら、友人達と国内の旅行や、趣味にと平凡な生活に感謝しながら、日を送っています。 |
| 奥西 秀樹 | 定年まであと 2 年を切りました。 |
| 笠井 貞夫 | 卒業 58 年です。昨年雪村教授が私どもの診療所の製薬会社の薬物勉強会に来てくれた。光栄です、eicosapentaenoic acid w3 の勉強会でしたが statins がもうひとつですから w3 が重要になるなと思いました。 |
| 日下部 裕美 | GW にトルコに行ってきました。すばらしい景色と世界三大料理のトルコ料理を満喫!! 次はオーロラを見に行こうと考えています。仕事半分、遊び半分で頑張っています。 |
| 重栖 幹夫 | 現在は池袋にある、3S ジャパン(株)に週 2 日間勤めております。 |
| 杉田 清美 | 去年は高血圧学会で、山本先生、岩尾先生にも久しぶりにお目にかかれました。またどこかの学会場でお会いできることを楽しみに致しております。 |
| 高折 和男 | 最近金も暇もない生活していますので大阪のラーメンの食べ歩きをして楽しんでいます。 |
| 立本 泰祥 | 今年春より働く環境・場所が変わりました。慣れるのが大変ですが頑張っています。 |
| 田中 基晴 | 新薬の申請で薬理を主に担当しています。 |
| 辻 満智子 | 私は年々趣味が増えて楽しく忙しくしております。 |
| 中西 均 | 名古屋市片隅から先生・皆様に御健勝をお祈りしています。 |

中村 敏子	子どもが二十歳になり、少しほっとしています。まずまず健康ですので仕事何とか続けています。
西村 敬治	3月にバイエルを退職致しました。
西山 好樹	すっかり馬齢を重ねました。
萩原 善行	名(?) 市長のもと、市大はどうなるのでしょうか。
東尾 尚宏	昨年3月末先端医療振興財団を退職しました。畑（家庭菜園）をつくり楽しんでいます。
疋田 優子	英語の勉強に四苦八苦しています。
藤田 明子	子供たちもだいぶ手が離れ、先日久しぶりにコンサートへ行きました。ちなみに K-POP です。
舟川 進	今春 33 年間勤めたシオノギ製薬を退職致しました。生活を楽しんでいます。
細木 和	病院通いの相変わらずの生活です。
町田 裕一	最近引っ越しました。
松島 成夫	老人性難聴が進んでおり困っております。
松村 靖夫	新しい薬学 6 年制もようやく一巡しました。まだまだ問題も山積みで頭が痛いことばかりです。
南野 優子	皆様お元気にされていますか。三浦先生、岩尾先生、この度は本当におめでとうございます。
安田 謙	健在です。
安田 俊吉	閉塞しています。
安田 正秀	42 年間、勤めました大阪薬科大学を今年 3 月末日をもって定年退職しました。
山口 麻貴	皆様お元気でしょうか？私はようやく4月の新人研修も終わり、新社会人として少し落ち着くことができました。
山下 直人	本年より兵庫県配属となりました。毎日楽しく仕事に励んでいます。
山田 浩	3 月末に大阪市を退職し小児科の診療所で仕事を始めました。
吉本 蓉子	後期高齢者に突入しましたが相変わらず 1 時間の早朝ウォーキングを続け旅行やシャンソンライブを楽しんでいます。

2012 洽学会誌

今年の出来事

3 月末に山口麻貴さんが修士課程を修了し、医薬品臨床開発 CRO 関連企業である株式会社リニカルに就職しました。

3 月 22 日に岩尾は公益社団法人日本薬理学会理事長に就任。

4 月に修士課程に川口真紗子が入学しました。川口さんは岡山大学工学部生物機能工学科を卒業されました。塩田講師の後輩に当たります。

10 月 1 日に岡真優子特任講師が京都府立大学大学院生命環境科学研究科応用生命科学専攻食環境安全性学の准教授に就任されました。栄養学士の養成を行っており、船江良彦先生のところでも研究されていた南山幸子教授の教室です。

10 月 8 日に山中伸弥教授がノーベル賞（医学・生理学賞）を受賞されました。

2012 年 10 月 8 日に今年のノーベル医学・生理学賞の発表があり、山中伸弥先生に授与されることになりました。12 月 10 日にはストックホルムで授与式が執り行われました。大変嬉しいニュースに皆様も接しられた事と思います。時の人としてテレビで特集番組が組まれて皆様よくご覧になっておられることと思います。山中先生は血小板活性化因子の循環薬理作用の解析という *in vivo* の実験から研究をスタートされました。その後、米国のグラッドストーン研究所で脂質代謝の研究に携わり、遺伝子改変動物の作製を行い予想外の研究結果から DNA エディティングの現象を報告されておられます。帰国後も分子生物学的手法を用いて ES 細胞の研究を続けられました。2005 年の血管 Vol28, No2 に「ES 細胞による心血管系治療への展望と課題」の総説を寄稿されています。その内容では ES 細胞を用いた可能性を熱く語っておられます。その後の iPS 細胞への発展はテレビや新聞に報道されており皆様もよくご存知のことと思います。典型的で古典的な薬理学の手法を用いた研究から出発して、分子生物学的手法を取り入れて研究を発展させてきたところは多くの研究者が共感するところも多いと思います。今後は実用化に向けて研究が加速されるように応援いたしましょう。

11 月 3 日に山中伸弥教授に文化勲章授与されました。